天理教はなぜ衰退するのか？－仏教思想と教祖の教えの復元－

天理教の教師養成機関である修養科の修了者数がここ数年激減しています。50年位前までは年間一万人位で推移していたものが、2017年には千人台になりました。このまま減少していくと10年後には千人を割るかもしれません。

修養科が出来たのは昭和16年で、それ以前は明治41年天理教が一派独立した年に出来た別科がその役割を担っていました。別科は半年で、年2回の入学でした。大正10年頃から一期の修了者数が千人を越えるようになり、昭和10年に南礼拝場が出来てかんろだいが神殿の中央に据えられた期は、一万人を越えました。その後、日中戦争がはじまった昭和12年以降は修了者が減少していきます。

この昭和12年に文部省から『国体の本義』という本が発行されました。この本は発行部数が100万を越えるもので、当時の日本国民に多大な影響を与え、日本は戦争の泥沼の中にはまっていきます。翌13年には別科一期の修了者は千人を切り、大幅な組織改編が行なわれた16年にその幕を閉じました。

天理教は昭和20年の敗戦を契機に、「復元」を掲げて出直しを期し、かぐらづとめや一部取りやめていたみかぐらうたが行われるようになり、別科の後身である修養科の修了者が年間一万人を越えるようになりました。

ところが再び修了者が別科の最後の頃に近づいています。今何が必要なのでしょうか。

	終了者数
1948（昭和23）年	11,512
1959（　〃34）年	10,334
1970（　〃45）年	11,526
1975（　〃50）年	15,858
1980（　〃55）年	12,629
1990（平成 2）年	7,520
2000（　〃12）年	4,451
2009（　〃21）年	3,138

最近の修養科修了者数（修養科は3カ月で毎月入学）

終了月	01	02	03	04	05	06	07	08	09	10	11	12	年間
2016	95	186	147	82	120	411	229	144	119	68	184	225	2010
2017	48	114	121	57	129	369	176	104	116	52	203	167	1656
2018	65	87	117	62	108	375	191	133	95	52	150	137	1572
2019	45												

1975年が修養科生が一番多かった年で、90年祭の前年です。

別科修了者の数

学校名 Name of School / 年度 Year	別科 Special Course 期 Time	計 Total	男 Male	女 Female
総数 Total		123,396	63,222	60,174
明治41年度 (1908)	1	36	36	—
42 (1909)	2	52	52	—
	3	107	101	6
43 (1910)	4	125	119	6
	5	178	161	17
44 (1911)	6	185	168	17
	7	301	271	30
大正1年度 (1912)	8	284	238	46
	9	320	278	42
2 (1913)	10	283	230	53
	11	329	261	68
3 (1914)	12	318	264	54
	13	296	240	56
4 (1915)	14	213	170	43
	15	174	161	13
5 (1916)	16	175	144	31
	17	180	151	29
6 (1917)	18	189	161	28
	19	245	204	41
7 (1918)	20	273	209	64
	21	295	212	83
8 (1919)	22	223	155	68
	23	299	228	71
9 (1920)	24	260	213	47
	25	517	405	112
10 (1922)	26	474	344	130
	27	1,103	767	336
11 (1922)	28	1,527	948	579
	29	2,474	1,564	910
12 (1923)	30	2,750	1,539	1,211
	31	3,737	2,222	1,515
13 (1924)	32	2,963	1,657	1,306
	33	4,169	2,327	1,842
14 (1925)	34	5,774	3,143	2,631
	35	4,585	2,422	2,163
昭和1年度 (1926)	36	1,994	1,095	899
	37	6,239	3,483	2,756
2 (1927)	38	2,166	1,088	1,078
	39	1,654	891	763
3 (1928)	40	2,304	974	1,330
	41	3,555	1,536	2,019
4 (1929)	42	2,166	1,039	1,127
	43	1,592	786	806
5 (1930)	44	1,522	772	750
	45	1,681	920	761
6 (1931)	46	1,717	911	806
	47	2,331	1,250	1,081
7 (1932)	48	1,949	1,040	909
	49	2,511	1,364	1,147
8 (1933)	50	3,482	1,723	1,759
	51	6,822	3,251	3,571
9 (1934)	52	5,397	2,427	2,970
	53	11,680	4,957	6,723
10 (1935)	54	6,867	2,989	3,878
	55	9,209	4,049	5,160
11 (1936)	56	2,511	1,207	1,304
	57	2,620	1,187	1,433
12 (1937)	58	2,098	919	1,179
	59	2,130	867	1,263
13 (1938)	60	970	398	572
	61	816	334	482

『天理教統計年鑑』昭和14〈1939〉年版

◎修養科の前身である別科（6か月）は明治41年に天理教師養成機関として出発。
◎大正10年1月教祖40年祭を大正15年に行うとの発表があり、倍加運動始まる。同年の27期に1,000名を越える。
◎昭和9年の第53期が11,680名で最大の人数となる。この年の10月15日に南礼拝場が完成し、かんろだいが据えられる。
◎昭和12年5月文部省、『国体の本義』発行（部数100万部以上）。同年7月に日中戦争始まる。
◎昭和13年、一期の入学者の数を1535名に限定（『潮の如く下』P7）。昭和16年4月より現在の修養科になる。

日中戦争の勃発は、教祖の教えを説く自由を奪っていった

昭和12年7月の日中戦争勃発は、すぐに天理教にも影響が出ます。

同年7月17日に文部省を訪れた中山正善2代真柱に対して、宗教局長は「時局柄、国民精神作興の上に充分力を尽されたい。殊に大天理教として、この際充分の働きを示して頂き度い」(『潮の如く中』P268)と国への協力を強く求めました。これに応じて、7月26日には、国策への協力を求める諭達第7号を教内に発し、具体的には、国の方針を信者に伝えるための講演会の開催、出征軍人の見送り等の軍への協力を求めました。

さらに13年11月には、文部省より天理教に対して、「元はじまりの話」はやめるよう、教理は『天理教教典』(明治教典)に則った方がいいぞといってきます。この時期、天理教の分派である「天理本道」に対する検挙、弾圧が始まっていたのですから、これに従わざるを得ませんでした。

明治教典は「第一　敬神章」から始まるもので、そこには「霊徳の最も顕著なる十柱の神を奉祀す」るとし、それらを総称して「天理大神と云う」と書かれています。

そこに書かれている「国常立」「伊弉諾」「伊弉冉(册)」「大日霎(天照)」などの神は、昭和12年に発行された『国体の本義』に出てくる神と重なるものです。

『国体の本義』は「大日本帝国は、万世一系の天皇皇祖の神勅を奉じて永遠にこれを統治し給ふ。これ、我が万古不易の国体である。」との一文から始まり、「我が肇国は、皇祖天照大神(あまてらすおほみかみ)が神勅を皇孫瓊瓊杵(ににぎ)ノ尊に授け給うて、豊葦原の瑞穂(みづほ)の国に降臨せしめ給うたときに存する」と続き、そのあと、古事記や日本書紀にあるクニトコタチやイザナギ、イザナミなどの神々による国生み神話が語られています。そのため、その国生み神話と異なる「元はじまりの話」などは許される状況にはなかったのです。

また、昭和14年に入ると、「おふでさき」「おさしづ」が回収され、よろづよ、三下り目、五つ下り目を削除した「新修みかぐらうた」が配布されました。

ここまで来ると教祖の教えを伝えるというような事はとても無理であったろうと思います。それとともに、別科の修了者は減っていきます。

『天理教教典』
中山新治郎
1903（明治36）年

天理教教典

第一　敬神章

本章は天神造化成育の靈德妙用を說て萬物調攝の天理に及ひ人類たるものは必す神祇を崇敬せざる可からざる所以を明にせらる

天地の悠久にして萬物の生成化育息まざる所以のものは神明調攝の天理に依る宇宙の森羅萬象皆其靈德の妙用に基かすと云ふことなしを而して主宰の神あり分掌の神あり各其靈德の妙用によつて神名を表彰す概して是を天神地祇八百萬神と云ふ是を以て其靈源に遡れは即ち一神に歸し其妙用を分ては萬神に亘る蓋し造化の大原にして萬有の根本也誰か尊仰敬事せさらむや然れとも八百萬神悉く其名を稱へて崇拜せむことは人の能くせさる所なり故ゑ靈德の最も顯著なる十柱の神を擧けて奉祀す即ち國常立尊、國狹槌尊、豐斟渟尊、大苦邊尊、面足尊、惶根尊、伊弉諾尊、伊弉册尊、大日孁尊、月夜見尊是也之を總稱して天理大神と云ふ

謹みて案するに天地未だ剖判せざるの時天神まづ成り給ひ至大至妙の靈德を以て造化の首をなし給ふされば之を主宰の神とも稱へ造化の神とも仰ぎ奉る也次に天

第一　大日本國體

一、肇國

大日本帝國は、萬世一系の天皇皇祖の神勅を奉じて永遠にこれを統治し給ふ。これ、我が萬古不易の國體である。而してこの大義に基づき、一大家族國家として億兆一心聖旨を奉體して、克く忠孝の美德を發揮する。これ、我が國體の精華とするところである。この國體は、我が國永遠不變の大本であり、國史を貫いて炳として輝いてゐる。而してそれは、國家の發展と共に彌〻、聳く、天壤と共に窮るところがない。我等は先づ我が肇國の事實の中に、この大本が如何に生き輝いてゐるかを知らねばならぬ。

天地開闢

我が肇國は、皇祖天照大神が神勅を皇孫瓊瓊杵ノ尊に授け給うて、豐葦原の瑞穗

第一　大日本國體　九

國體の本義　一〇

の國に降臨せしめ給うたときに存する。而して古事記・日本書紀等は、皇祖肇國の御事を語るに當つて、先づ天地開闢・修理固成のことを傳へてゐる。即ち古事記には、

天地の初發の時、高天ノ原に成りませる神の名は、天之御中主ノ神、次に高御產巢日ノ神、次に神產巢日ノ神、この三柱の神はみな獨神成りまして、身を隱したまひき。

とあり、又日本書紀には、

天先づ成りて地後に定まる。然して後、神聖其の中に生れます。故れ曰く、開闢之初、洲壤浮かれ漂へること譬へば猶游ぶ魚の水の上に浮けるがごとし。その時天地の中に一物生れり。狀葦牙の如し。便ち化爲りませる神を國常立ノ尊と號す。

とある。かゝる語事、傳承は古來の國家的信念であつて、我が國は、かゝる悠久

『国体の本義』P9. 文部省.1937（昭和12）年

仏教学者の末木文美士氏は『日本の思想をよむ』という本の中で『国体の本義』を採り上げ、≪本書の特徴は、「国体」を政治次元の問題としてだけでなく、思想や文化の問題に立ち入って日本固有のあり方を追求したところにある。－中略－このように明治以来蓄積されてきた神話論・歴史論・文化論等が、すべて集大成され、総合的な日本論とも言うべきものが作り上げられている。(P211)≫とし、≪「臭いものに蓋」で、目をつぶって済ませられるような杜撰な理論ではない≫と解説しています。

『日本の思想をよむ』は、日本の四十人の思想家と三冊の書物を採り上げ、それに簡単な解説を付けています。その思想家の中の一人として中山みきが入っています。教祖（中山みき）は明治二十年に身を隠されていますから、『国体の本義』を目にすることはなかったのですが、もし読んだとしたらどんな印象を持たれたでしょうか。

700年 800 900 1000 1100 1200 1300 1400 1500 1600 1700 1800 1900 2000

飛鳥・奈良時代 | 平安時代 | 鎌倉時代 | 室町・安土桃山時代 | 江戸時代 | 明治時代以降

◉710年、平城京遷都。
◉712年、『古事記』成る。
752年、東大寺大仏開眼供養。
794年、平安京遷都。
804年、最澄・空海入唐。
866年、藤原良房が摂政になる。
（藤原氏を頂点とする摂関体制の時代へ）
1020年、藤原道長、無量寿院（法成寺）建立。
このころ、『枕草子』『源氏物語』が書かれる。
1053年、藤原頼通、平等院鳳凰堂建立。
1086年、白河上皇により院政が始まる。
939年、平将門の乱・藤原純友の乱。
1156・1159年、保元・平治の乱。
1180年、平氏の南都攻めにより東大寺炎上。
1185年、平家滅亡。鎌倉に武家政権成立。
1221年、承久の乱。鎌倉の武家政権確立。
1232年、御成敗式目（貞永式目）成る。
このころ、蘭渓道隆・無学祖元ら宋の禅僧が来日。
1274・1281年、蒙古襲来。
1333年、鎌倉幕府滅亡。
1336年、後醍醐天皇が吉野に南朝をつくる。
1336年、足利尊氏、室町幕府を開く。
1342年、足利尊氏、京・鎌倉の五山を定める。
1397年、足利義満、金閣造営（北山文化発展）
1401年、足利義満、明との勘合貿易開始。
1467〜77年、応仁の乱（戦国の世へ）
この頃から畿内・北陸を中心に一向一揆盛ん。
1489年、足利義政、銀閣造営（東山文化発展）
1549年、ザビエル来日（キリスト教伝来）
1573年、織田信長により室町幕府滅亡。
1590年、豊臣秀吉、天下を統一。
1600年、関ヶ原の合戦で徳川方が勝利。
1603年、徳川家康、将軍になる。
1615年、武家諸法度・禁中並公家諸法度を布令。
1630年、朱子学の昌平坂学問所の基ができる。
元禄（1688〜1704）のころ、元禄文化発展。
このころから蘭学が発展。
1715年ころ、新井白石『西洋紀聞』成る。
このころ、国学が発展し『万葉集』などを再評価。
1800年、伊能忠敬、蝦夷地を調査。
1853年、ペリー来航。
1867年、大政奉還・王政復古。
1889年、大日本帝国憲法公布。
1894〜95年、日清戦争。
1904〜05年、日露戦争。
1931年、満州事変。
◉1937年、『国体の本義』刊。
1941〜45年、太平洋戦争。
◉1946年、日本国憲法公布。

古事記

最澄 766〜822
空海 774〜835
源信 942〜1017
法然 1133〜1212
栄西 1141〜1215
鴨長明 1155〜1216
慈円 1155〜1225
明恵 1173〜1232
親鸞 1173〜1262
道元 1200〜1253
叡尊 1201〜1290
日蓮 1222〜1282
無住 1226〜1312
一遍 1239〜1289
夢窓 1275〜1351
世阿弥 1363？〜1443？
一休 1394〜1481
蓮如 1415〜1499
ハビアン 1565〜1621
鈴木正三 1579〜1655
伊藤仁斎 1627〜1705
鉄眼 1630〜1682
白隠 1685〜1768
安藤昌益 1703〜1762
富永仲基 1715〜1746
本居宣長 1730〜1801
平田篤胤 1776〜1843
中山みき 1798〜1887
吉田松陰 1830〜1859
福沢諭吉 1834〜1901
内村鑑三 1861〜1930
和辻哲郎 1889〜1960
清沢満之 1863〜1903
南方熊楠 1867〜1941
鈴木大拙 1870〜1966
西田幾多郎 1870〜1945
柳田国男 1875〜1962
宮沢賢治 1896〜1933
田辺元 1885〜1962
丸山真男 1914〜1996

国体の本義

日本国憲法

【凡例】
本書の項目に取り上げられている人物の在世年代。
◉ 本書の項目に取り上げられている書物の成立年代。

『日本の思想をよむ』P218.末木文美士.角川書店.2016

古事記とは異なる「天地初発の時（元はじまりの話）」を語る教祖

『国体の本義』は万世一系の天皇が統治するのが大日本帝国の万古不易の国体であるとし、その根拠を天照大神が神勅を瓊瓊杵（ににぎ）尊に授けて日本に降臨したという古事記・日本書紀の記述に求めています。その古事記の冒頭に、その編纂の理由について、古くから伝わる帝紀と本辞は国家組織の根本にもあたり、政治の基礎（王化の鴻基－こうき）であるが、そこにうそなどが混じり真実が分からなくなる恐れがあるから、今間違いを正し真実を伝えるためとその編纂意図が記されています。そして生まれたのが『国体の本義』の冒頭にも引用されている「天地の初発の時、高天ノ原に成りませる神の名は、天之御中主ノ神、・・・」で始まるものでした。

ところが、中山みきは「おふでさき」に

3号15. このよふのにんけんはじめもとの神　たれもしりたるものハあるまい

16. どろうみのなかよりしゆごふをしへかけ　それがたん／＼さかんなるぞや

と記し、古事記の話とは別の「天地の初発の時」を語ります。

また、

3号149. にち／＼に神のはなしをたん／＼と　きいてたのしめこふきなるぞや

とし、みきが語る神の話の中にこそ、「こふき―政治の基礎．王化の鴻基）」があるというのです。

「おふでさき」の「こふき」については、『天理教事典』（第3版P326）に「漢字表記は、古記、綱紀、功記、口記、後記、光輝、鴻基、香気など種々の漢語が考案されている。古記は明治10年代の文献に見える。鴻基は『古事記』の序文に見える言葉である。口記は中山正善『こふきの研究』（158頁）に見える。」とあり、いろいろな意味が考えられますが、「鴻基」説は芹沢茂氏が『風の心』の中で主張しています。残念なことにこの本はどういうわけか発売後直に販売停止になってしまいました。

《こうきとは何かを考えると、まずその意味であるが、例の如く、古記、綱紀、功記、口記、光輝……
様々の言葉が思い浮かぶ。なかでも鴻基という言葉は、日本の古典でまず挙げられる『古事記』の序文の結びで用いられている。『古事記』に述べることこそ、日本の国が治まっていく根本原理ともみられることを、「王化の鴻基」と言っている。にほんのこうきとは「日本の鴻基」ということではないのか。（『風の心』P105.芹沢茂.1993）》

【古事記】（岩波文庫版P15）
《ここに天皇詔りたまひしく、「朕聞きたまへらく、『諸家の□る帝紀及び本辞、既に正實に違ひ、多く虚偽を加ふ。』といへり。今の時に當たりて、其の失を改めずは、未だ幾年をも経ずしてその旨滅びなむとす。これすなはち、邦家の経緯、王化の*鴻基*なり。故これ、帝紀を撰録し、旧辞を討覈して、偽りを削り實を定めて、後葉に流へむと欲ふ。」とのりたまひき。

神の顕現を説き、哲学的で社会批判を含んだ教理へと展開

『日本の思想をよむ』の中で中山みきはどのように書かれているのでしょうか。末木文美士氏は、『日本宗教史』(岩波新書.2006.P201)や『近世の仏教』(吉川弘文館.2010.P165)でも中山みきについて記しています。

≪中山みき 「みかぐらうた」　封建主義を誡(いまし)める女性の力≫

ーみき自らしたためた千七百余首の「おふでさき」、手振りで歌う「みかぐらうた」、折々の「おさしづ」は、天理教の聖典をなし、天地の始めや人の道を語る。ー

日本の仏教史を研究していて物足りなく思うことは、女性がほとんど出てこないことだ。もちろん光明皇后のようにカリスマ化され、崇拝対象となる女性もいたし、無学祖元の法を継いだ無外如大のような尼僧も有名だ。 ー中略ー

邪馬台国の卑弥呼がシャーマン王であったように、女性のほうが宗教的資質に富んでいるともいえる。 ー中略ー

女性による宗教の創唱の典型は、天理教の開祖中山みきである。みきは大和の地主の主婦であったが、長男の足の病気を治すために山伏の祈祷を受けた時、自ら神がかりして「天の将軍」がみきの身体を「神の社」としてもらい受けると宣言した。みき自身思いも寄らないことで、幾度も自殺を図り、家は没落して、貧乏のどん底に落とされた。

しかし、病気治しと安産の祈祷に力を発揮して、次第に信者を増やしていった。これまでひたすら忍従するだけだった女性が、神の力によって既存の秩序を打ち壊して男たちを屈服させ、その教えにひれ伏させたのである。

その教えは単なる現世利益を超えて、神のこの世界への顕現を説き、哲学的で社会批判を含んだ教理へと展開していく。明治維新直前の「みかぐらうた」では、「かみがでゝ　なにかいさい(委細)を　とくならバ　せかいーれついさ(勇)むなり」と、神のもとで世界は平等とされ、「ーれつに　はやくたすけを　いそぐから　せかいのこゝろも　いさめかけ」と、世界中が力を合わせて急いで世直しに尽くさなければならないという終末論的な救済観が表明されている。

維新後も、七十代のみきは自ら筆を執って『おふでさき』によって教えを広めるとともに、その地元(現・奈良県天理市)を聖地として、陽気暮らしの理想世界を作る作業を推し進めた。**思想の中核には「せかいーれつ」の平等主義があり、権力者である「高山」の横暴を誡め、「谷底」の民衆の救済を説くものであったから、激しい弾圧を受け、みきは何度も投獄された。**それでも教えを曲げることなく、亡くなった。ー中略ー

既成の宗教が硬直した教義と組織に縛られる中で、**女性の力を最大限生かし、自由な思想と行動を展開してきた新宗教の世界は、改めて見直すべき魅力に満ちている。**(『日本の思想をよむ』P170)

仏教思想をベースに説かれる教祖の教え

『日本の思想をよむ』に出てくる思想家は、江戸時代前はそのほとんどが仏教の僧侶です。これは末木文美士氏が、仏教学者であることも関係があるのかもしれませんが、日本の思想を考える上で仏教の存在は非常に大きいということを示していると思われます。

ここでは、末木氏の著作である『思想としての仏教入門』から、教祖（中山みき）の教えと関係があるのではないかと思われることについて記してみましょう。

〈人間の構成要素〉

6－21．十人のなかに三人かたうでわ　火水風ともしりそくとしれ

このおふでさきは、みきの弟子の中の片腕ともいわれるような重要な3人が死ぬ（しりぞく）ことを言われたものです。

『おふでさき註釈』には《つとめ人衆の中、片腕ともなるべき三人は、火水風の守護を止めるような事があるかも知れない、という事をよく承知しているがよい。／　註　かたうでは、片腕の意。／　東若井の松尾市兵衛、竜田の乾勘兵衛、大西の北野勘兵衛の出直しを見て、当時の人々は、このお歌に思い当たったという。》とありますが、この3人は「片腕」と呼ばれるような立場にはありません。「片腕」と自他ともに許すのは、当時の中山家を動かしていた秀司、まつゑ、山沢良助の3人と考えられます。

ここの問題は、3人とは誰かということではなくて、世界の構成要素は「地・水・火・風・空・識」の六つで、そのうちの人間の要素を「火水風」の三つで表していることです。

空海の『即身成仏義』の体系は、六大・四曼・三密としてまとめられる。六大というのは、この世界を地・水・火・風・空・識の六つの構成要素の集合体としてみることで、この六大が宇宙の本体とされる。地・水・火・風・空の五つは物質的な要素であり、それに対して識が精神的な要素になる。五大まではインド以来の経典にも出るが、それに精神的な要素である識大を加えて六大としたところに空海の特徴がある。（『思想としての仏教入門』P86）

曼荼羅の宇宙観＝かぐら（かんろだい）づとめの原型

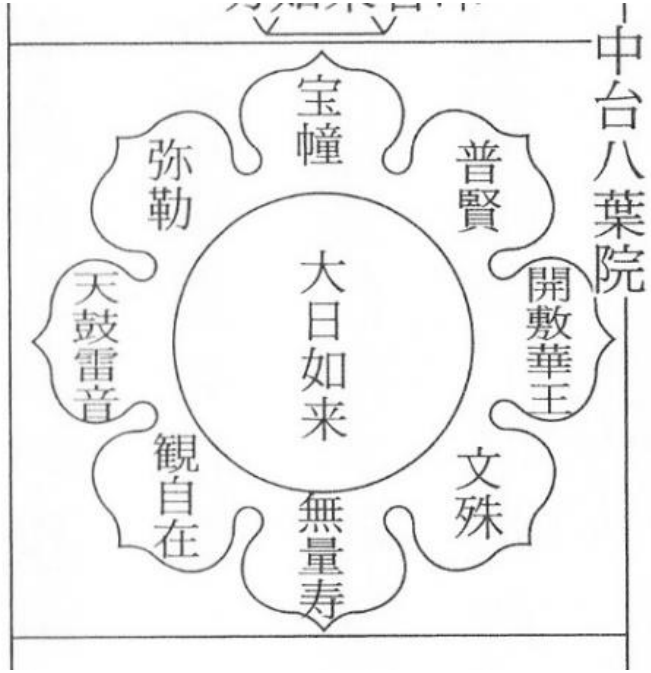
かんろだいを中心に八人がそれを取り囲む「かぐらづとめ」は、中心に大日如来を配し、その周りを四仏と四菩薩が取り囲む胎蔵界曼荼羅の中心に描かれている中台八葉院とたいへん似ています。かぐらづとめでは10人の「つとめにんじゅ」にぬくみ、すいきなどの体の働きが割り当てられています。これは宇宙の本質が曼荼羅であるとともに、人間の体も小さな曼荼羅であることを教えてくれます。

この二人は、理論的には男女の交合を表現する「かんろだい」の位置に入る

櫟本分署跡保存会作成

かぐらづとめの模型

胎蔵界曼荼羅の中心にある中台八葉院



曼荼羅とはなにか

曼荼羅の宇宙観

　次に四曼は四種曼荼羅のことで、世界の相、すなわち現象的なすがたを表わすものとされる。マンダラ（曼荼羅）という語は、本質を意味するマンダに接尾語のラがついたもので「本質を有するもの」の意味であり、**六大よりなる宇宙の本質を、感覚的に受け止められるように表現したものが曼荼羅である**。

胎蔵曼荼羅は、中台八葉院を中心に、その周囲を三重の諸院で囲む構成になっている。中台八葉院は八葉の蓮華の中に四方四仏と四菩薩を描き、中央の大日如来とともに仏の世界を表現する。八葉の蓮華は人間の心臓を表わし、それゆえ、万物の核心を表わす。胎蔵界の四仏は西・無量寿如来、南・開敷華王（かいふけおう）如来、東・宝憧（ほうどう）如来、北・天鼓雷音（てんくらいおん）如来で、四菩薩は、西南・文殊、東南・普賢、東北・弥勒、西北・観音の諸菩薩である。胎蔵曼荼羅はこの中台八葉院を中心に、同心円的に展開する十二院からなるが、そのもっとも外側の外金剛部院にはさまざまなインドの神々が集められ、単なる仏・菩薩だけではなく、仏教外の神々をも含む壮大な体系をなしている。

曼荼羅は感覚的な表象を用いて、この世界を仏・菩薩の世界として描き出すが、注意すべきは、図として描き出されたものだけが曼荼羅ではなく、**我々の身心の存在もまた一つの小さな曼荼羅であり、さらに六大の世界そのものもまた大きな曼荼羅**なのである。描かれた曼荼羅をなかだちとして、ここでも大宇宙と小宇宙が対応する。（『思想としての仏教入門』P87）

胎蔵界曼荼羅

密教の世界を表現する「かぐらづとめ」と「みかぐらうた」
ー人間が神になる（即身成仏）方法ー

三密とは、具体的に我々がその大宇宙と一体化する方法を述べたもので、身・口・意のことであり、この三つの働きによって、諸仏と修行者の一体化がなされ、かくて即身成仏が実現すると説かれています。

教祖（中山みき）は、宇宙の本質を表す「かぐらづとめ」とともに『みかぐらうた』を教えられました。「みかぐらうた」は5，7調のうたに手振りを付けて歌い舞うものですが、三密の「身＝手振」、「口＝言葉（歌の内容）」、「意＝神（仏）の心を自分の心とする」と解釈することもできるように思います。

密教の壮大な世界が、「かぐらづとめ」と「みかぐらうた（12下りの数え歌）」によって表現されているのです。

三密と密教の意義

三密は、六大・四曼の体系を背景に、具体的に我々がその大宇宙と一体化する方法を述べたものである。**三密というのは、身・口（くー語）・意の三業のことであるが、それが仏のはたらきと一体になって秘密のはたらきを示すことから、三密といわれる**。具体的には、身密は手で印契（印相）を結ぶ。印契というのは、両手とその指で特定の形を示し、それによって仏のはたらきを示そうというものである。語密は、口で真言（マントラ）を唱える。真言は呪とも訳され、諸仏のはたらきを象徴する言葉で、通常サンスクリット語の音写をそのまま用いる。意密は、心において諸仏と等しい三昧に入ることである。これら**三密のはたらきによって諸仏と修行者の一体化がなされ、かくて即身成仏が実現する**というのである。

以上のように、密教は壮大な象徴論的な世界論、宇宙論を展開し、その世界と一体化するところに即身成仏の実現をみようとする。それは世界を実在視する点において、また、感覚的、官能的な存在に価値を認める点などにおいて、仏教の中でも極めて異端的な位置に立ち、特に感覚的、官能的なものの重視は、男女の性的な結合にも価値を与えるようになった。（『思想としての仏教入門』P91）

ー心による極楽浄土の実現ー

「心（こゝろ）」は『みかぐらうた』に26回出てくる最も多いことばです。
一下り目には、

三ニ　さんざい（散財）こゝろをさだめ　四ツ　よのなか（大和の古語で、「豊年満作」）

とあって、心のあり方、その行いによって、豊かな社会の実現が説かれています。
また、四下り目では、

六ツ　むらかたはやくにたすけたい　なれどこゝろがわからいで
七ツ　なにかよろづのたすけあい　むねのうちよりしあんせよ
八ツ　やまひのすつきりねはぬける　こゝろはだんだんいさみくる
九ツ　こゝはこのよのごくらくや　わしもはやばやまゐりたい

といわれ、「よろづのたすけあい」によって「こゝはこのよのごくらく」になるとあります。
このような考え方は、仏教にも「是心作仏、是心是仏」ということばで表現され、阿弥陀仏も極楽浄土もどこか遠くにあるわけではなく、この私の心の中にあるとされ、唯心の弥陀（浄土）と呼ばれるそうです。
ただ、『みかぐらうた』では豊かな社会の実現に向けた心構えを具体的に説き、まさに実態としてこの世を極楽にする考えが示されるのです。

前十三観のうちでもう一つ重要な個所は、第八観に「是の心、仏と作り、是の心、是れ仏なり」（是心作仏、是心是仏）と述べられている個所である。これは阿弥陀仏といっても、この心の外にあるわけではなく、三昧状態で達せられる心のあり方が、そのまま仏の状態であることをいっている。この立場を徹底すれば、**阿弥陀仏も極楽浄土もどこか遠くにあるわけではなく、この私の心の中にある**ことになる。このような見方を己心（こしん）の弥陀（浄土）、あるいは唯心の弥陀（浄土）と呼ぶ。この立場は天台系統の浄土教や、また禅と融合した浄土教において重視された。（『思想としての仏教入門』P154）

ひながたの道－陽気づくめへの実践

天理教では立教以後の教祖50年の生涯を信仰生活の手本として仰ぎ、それを目標にして信仰生活を進めるという教理があり、これは「教祖ひながたの道」といわれます（『天理教事典』第3版P804）。天理教の信仰は、助けて下さいとお願いをするのではなく、自分自身が教祖が歩まれた人だすけの道を歩むことです。

それは、本来のブッダと修行者である菩薩の関係でもあるようです。そして菩薩の役割は仏国土を浄めてそこを浄土にすることです。そこに仏教本来の教えと天理教の教えの共通性を見出す事が出来ます。

従来浄土教の解釈に当たって、阿弥陀仏と衆生の関係は、だいたい救済者と救済されるものという関係で考えられていたように思われる。しかし、大乗仏教の原点に立ち返るとき、ブッダと修行者の関わりはもう少し違い、**修行者は菩薩であり、ブッダはその菩薩の理想像として、菩薩たちの先を進むもの**という面を持っていたはずである。先を進むものと後から進んでいくものが、人格的に関わっていくこと、それがブッダと菩薩たちの関わりである。そしてその際、ブッダが模範を示し、菩薩たちがその後を進んでいく道は、利他の道である。利他とは自分の存在を孤立したものとみず、他者との関わりの中でみてゆくことに他ならない。広大な誓願を発し、実現したとされる阿弥陀仏は、まさに神話的に表現された他者の理想である。

浄土についても、それを死後の理想状態とみることは、必ずしもまちがいでないとしても、それが唯一の解釈ではない。そもそも浄土という言葉には、サンスクリット語の原典には必ずしもぴったりと当てはまる単語がないが、仏国土を浄めるという意味で、「浄仏国土」という表現は出てくる。すでにある浄土にただ生まれ合わせるという受け身の態度ではなく、**菩薩として仏国土を浄めるという積極的な活動の方面も、もう少し考えてゆく必要がある**のではないだろうか。（『思想としての仏教入門』P156）

「やしろ」と「ほこり」ー如来蔵思想

「おふでさき」に〔しんぢつに月日の心をもうにわ　めへ／＼のやしろもろた事なら（6号57）〕というのがあります。天理教では、「月日のやしろ」は教祖の立場を指す（『天理教事典』3版P575）とされていますが、「やしろ」は「おふでさき」に4例あり、どれもこの解釈では説明が困難です。とくにこの6－57の「めへ／＼」という表現から考えれば、「やしろ」は銘々の人間（人間すべて）と考えると理解しやすくなります。

また、〔一れつにあしきとゆうてないけれど　一寸のほこりがついたゆへなり（1号53）〕といわれ、〔このほこりすきやかはろた事ならば　あとハよろづのたすけ一ちよ（2号20）〕とあります。人間に本来的な悪はなく、悪く見えるのはちょっとほこりが付いたようなものだから、それをはらえば、「たすけ一条」の教祖の道を歩むことができるというわけです。

この考え方は、大乗仏教の如来蔵思想とほぼ同じではないかと思います。

大乗仏教の一つの特徴は、**我々もまた菩薩であることができ、したがって、ブッダとなることができる**というところにある。そこで、だれでもブッダになることができるということを理論的に説明するために考え出されたのが、如来蔵の理論である。

如来蔵というのは、原語はタターガタ・ガルバで、タターガタは如来、ガルバは母胎の意で、衆生が将来ブッダとなる可能性を持っていることを、「如来をその母胎に持っている」と表現したものである。ガルバは母胎であると同時に、母胎の中の胎児をも意味するので、如来蔵は、将来如来となるべき胎児の意味にもなる。要するに将来ブッダとなることのできる可能性のことで、その可能性がすべての衆生に内在すると主張するのである。如来蔵はまた、仏性ともいかれる。東アジアでは、如来蔵よりも仏性という表現の方が好まれた。

ところで、母胎の中の胎児に喩えられたり、衆生がブッダとなる可能性を持っているというと、如来蔵は衆生の中に内在するなにものかであるように考えられる。そのような面も確かにある。しかし他方、如来蔵はすべての衆生に遍満しているブッダの本性とも解されるので、その意味では法身と同じことになる。そのように解すると、何かが衆生の心の中にあるというよりは、**衆生の心が本性的にはブッダそのものと同一でありながら、それが煩悩のために覆われ、隠されていて、現われていないのだ**、というようにも解される。

衆生の心がその本性上もともと浄らかであるのに、煩悩によって汚されているという発想は、原始経典にもみえ、般若経典において大きく発展した。そのように本来的に清浄な心を自性清浄心といい、外側から付着した煩悩を客塵煩悩と呼ぶ。如来蔵とは自性清浄心のことに他ならない。如来蔵はまた、煩悩の中にある真如だとも解釈される。

如来蔵思想は心に関して楽観的な思想である。本来的に心は浄らかで、ブッダと同一であり、煩悩は外から付着しているだけだというならば、その煩悩を取り去れば、容易にブッダたることを実現できることになる。（『思想としての仏教入門』P161）

悪因縁と業、輪廻

天理時報

教典の一部改訂される 35年ぶり

主な改訂部分「いんねん」の説き方と身障者への言葉遣い

陽気ぐらしにすべて復元

教典一部改訂について

天理教教義及史料集成部主任 上田嘉成

今週の紙面

昭和59（1984）年に『天理教教典』の一部が改訂されました。改訂のポイントは「生まれながらにして、完全な身上を借りることが出来ないのは、明らかに、前生の心のほこりの結果である」という部分が削除された事です。この改訂は前年に起きた差別事件（ある職業を蔑視し、それを神の意志とする表現があった）をきっかけとして、天理教の因縁観が問題になり、その内容を「的確」に表現していたのが削除された部分でした。

今世の状態は、前世の通り方の結果であり、今世その状態に満足して（たんのうして）暮らせば、来世は今より良い状態の所に生まれ変われるというのが天理教の主要な「教理」でしたが、教典が改訂されたことによって表向きこの教理が説けなくなり、「説ける教理」がなくなって困惑しているのが今の天理教です。ただこれは、天理教の専売特許ではなくて、仏教では業－輪廻の思想として説かれてきたものですし、また教祖（中山みき）が教えたものでもありません。

インドのカーストの差別は、業と輪廻の説に密接に結びついている。業と輪廻についてはすでに触れたが、**行為の善悪によって次の生の境遇が決まり、それを永遠に繰り返す**というものである。その際、生まれ変わる境遇としては、上は天の神々から、下はさまざまな動物や、さらには地獄が考えられ、それを六道に整理する。この業－輪廻の思想が差別に結びつく。というのも、低いカーストやカースト外の不可触民に生まれるのも、やはり悪い行為をなした報いと考えられるからである。

これはインドのことだけではなく、**日本でも江戸時代、被差別部落に布教する際、そのような境遇に生まれたのは前世が悪かったからであり、それゆえ現世の境遇を甘んじて認め、その代わりに現世でよい行いをして来世によい生まれを得るようにと勧められた**。このように、業－輪廻の思想は差別を固定化し、よい境遇の人には自分が恵まれていることを合理化し、悪い境遇の人にはその境遇に甘んじるように諦めさせる役割を果たしてきた。社会的な階層だけでなく、身体の欠陥や夭折、その他さまざまな不幸もこうして説明された。

業－輪廻の思想は、一面では確かに合理的な側面を持っている。現世の範囲だけで考えると、善良な人が不幸に陥ったり、悪いことばかりしている人が安楽に一生を終える例は少なくなく、あまりに不合理、不平等が多すぎる。－中略－

業－輪廻の思想は前世と来世の両方を持ち込むことによって、この難問を一気に解決する。**現世の苦難は、前世の悪に対する帳尻合わせであり、現世の幸福が足りないところは、来世で補われるというのである。説明としてはこれ以上ない完璧なものである。それゆえ、仏教もその思想を採用し、仏教を通して他の文化圏へも広まることになった。**（『思想としての仏教入門』P174）

「業ー輪廻の因縁論」を乗り越える「もとのいんねん」

教祖が生きていた江戸時代の末期には、仏教でも業ー輪廻による因縁論が説かれていました。

「おふでさき」に「このよふハあくしまじりであるからに　いんねんつける事ハいかんで（1号62）」というおうたがあります。これは「この世の中にはいろいろと悪い事も起きてくるが、それをいちいち前世の因縁が今表れているのだ、などと考えるな」ということではないでしょうか。

「おふでさき」には「いんねん」という言葉が13例あります。その中身は業ー輪廻による因縁論だったり、原因―結果という意味であったりしますが、その中に「もとのいんねん」が3例あります。

「月日にわにんけんはじめかけたのわ　よふきゆさんがみたいゆへから（14号25）」と、この人間世界が生み出されたのは、みんなが幸せに暮らすのを見たいゆえだといわれ、これこそがすべての「もとのいんねん」であると説き、業ー輪廻の因縁論を乗り越えさせたのです。

人間はみな「神のやしろ」で今不幸な状態にあるのはちょっとのほこりが付いたゆえであり、そのほこりを払い、「たすけ一条」の教祖の道を歩むならば、そこに「陽気づくめ」の世界が生まれてくるというのが、教祖の教えです。

天理教衰退の原因　⇒　**教祖の教えが存在しないところに、天理教もまた存在できないのです。**

業ー輪廻の思想が差別の固定化を招いたり、あるいは場合によっては、仏教が人々を脅すのに用いられるとしたら、非常に危険な思想である。**不幸に苦しむ人に向かって、あなたの不幸は過去の業によるのだから、その業を断つために必要だといって、理不尽な要求をして、人の不幸を食い物にする宗教もないわけではない**。

業ー輪廻の説は、先に触れた大乗経典の神話的言説と同じレヴェルの言語とみるべきであろう。それは事実を説明する言葉ではない。事実として自分が過去世にいつどこでどのような境遇であった、というのはおよそナンセンスで、証明できない。しかし、私たち自身の内側を省みるとき、現世だけで解決のつかない問題があまりに深く根差している。それは「無始の無明」と同質のことであり、私の心の奥底の、由来の知れない何ものかである。その次元ではじめて現世を超えた業ということが意味を持ってくる。それを事実の問題と取り違えないことが、仏教が差別の思想に陥らないためにも重要であろう。（『思想としての仏教入門』P179）